

国民国家アメリカの創造とプリマスの記憶の神話化

Sanctification of Plymouth Rock and the Creation of American Nation's Puritan Image

金井 光太郎

KANAI KOTARO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Tokyo University of Foreign Studies, Institute of Global Studies

Summary

National monuments and commemorations symbolize the fundamental cause of a nation state, and they teach an image of what the state is and how the people are supposed to live in it as nation. The nation makes efforts to construct its image based on their created national traditions and identity. The United States had to create their identity in their rapidly changing social process and with few historical materials. When they needed to transform their national identity adjusting to emancipation of slavery, it was necessary to construct a new image of the United States. In that context the colonial origin of America should never be Jamestown, Virginia, because the colony had been in the first stage, like a boomtown, formed by a lot of profit seeking single men. On the other hand, Pilgrims in Plymouth could symbolize American colonists with serious faith, good family and active pioneering. Their origin would guarantee American development and individualism with ability to contract and cooperate. President Lincoln contributed a great deal to construct the national memory of colonial origin and history since then after self-made man model. Thus, Thanks Giving holiday and Plymouth Rock tell the whole American nation that America is a land of free and there live the people of hardworking and love.

キーワード

プリマス・ロック 国民国家 国民神話 南北対立 ピルグリム・ファーザー 家庭神話 感謝祭

Keywords

Plymouth Rock; nation state; national myth; the South and North Rivalry; family myth; Thanksgiving Day

原稿受理: 2017.02.28

Quadrante, No.19, (2017), pp.103-115.

目次

はじめに

1. アメリカの独立とピルグリムの神話化

1-1. アメリカ意識とプリマス上陸

1-2. プリマスタウンの「先祖の日」

1-3. アメリカ独立とピルグリムという記憶

2. 新生国家の危機とメイフラワー号の盟約伝説

2-1. アダムズ演説と愛国の情

2-2. 憲法起源としてのメイフラワー号の盟約

2-3. アメリカ西方発展の起点としてのプリマス

3. 国民国家アメリカの誕生

3-1. カナダをめぐる英米冷戦

3-2. 国家の危機とアメリカ人意識

3-3. アメリカ国民の創造

4. ピルグリムのパトリオティズム

4-1. プリマス上陸 200 年の成果

4-2. 財産の平等と民主共和政の基礎

4-3. プリマス上陸から大陸国家へ

5. 南北分裂の危機と家庭の感謝祭の神話

5-1. 人間ピルグリムへの共感

5-2. 英雄の上陸から家庭での感謝へ

おわりに

はじめに

国民国家、アメリカ合衆国の起源は二つある。国民国家に関する伝統的な考え方では、国民の多数派であるイギリス系移民が独立 13 州の領域内部で初めて恒久的入植地を開拓してコミュニティを建設したときが、合衆国の起源となるであろう。そうであれば、現在のヴァージニア州に 1607 年に



ジェームズタウンが建設されたことが、起源であることは間違いない。入植当初は住民死亡率が高く社会も不安定であり、また多くの入植者の願望としては、タバコ栽培で資金を稼ぎ本国に戻って土地を購入したいというものであったとしても、その後ジェームズタウンを首都として、ヴァージニア植民地は発展を遂げ繁栄してゆく。ヴァージニアの起源として、そしてアメリカ合衆国の起源として、ジェームズタウンはイギリス系移民の国であるアメリカ合衆国の歴史を代表する存在であるといつてよい。事実、アメリカ植民 400 周年祭が 2007 年に盛大に挙行されている。

ところが、ジェームズタウンに加えて、1620 年メイフラワー号に乗ってきたピルグリム・ファーザーズが、現在のマサチューセッツ州プリマスに上陸したことも、アメリカ合衆国の起源として記憶されている。プリマスタウンは厳しい気候と痩せた土地で、豊かに繁栄したわけではない。プリマス植民地自体が北のマサチューセッツ植民地に併合された後も、プリマス地域はニューイングランドでも周辺的な地位を保持するにすぎず、プリマスタウンも静かな田舎町であった。プリマスは入植の時期もジェームズタウンに 10 年余り遅れ、その後の発展するアメリカを代表する活発なコミュニティとなったわけではない。取り立てて別にもう一つのアメリカ起源にする理由はなさそうであるのに、大きな注目を浴びるようになったのはなぜであろうか。

18 世紀から 19 世紀初めは国民国家構築の時代であった。文化的にイングランドとつながっていたアメリカは、大ブリテン連合王国の一体化から排除されてゆく。本国のイギリス人は、アメリカを自分たちとは違う別世界であり、植民地であると見下すようになり、当初それに強く反発していたアメリカ人もまた自らを本国と違った独自の存在であると意識して、自らのアイデンティティを模索するようになる。アメリカ人にとって苦難多き移住先にも愛着を抱き、惜しみなく労力を注ぎ込んですばらしい新天地を創り上げた物語が大事となった。イギリスとの絆を断ち切って独立を達成すると、アメリカ人は合衆国を、発展し続ける自由な新天地であるとみなした。その新天地でアメリカ人はリスクを恐れず、自らの労働で開拓を

進める自由な人々なのであった。

しかし、プリマス植民地は国民国家アメリカを最適に表象するとはいえないであろう。アメリカ国民の多数派がピルグリムと呼ばれるようなピューリタンではない。入植者は専ら白人のイングランド人であり、民族多様性を反映するものではない。活発な入植活動で「アメリカらしく」急速に発展を遂げていったわけでもない。そうした「アメリカらしさ」であれば、むしろボストンに当てはまる特質である。ボストンはウィンスロップ総督の強烈な指導の下で急速な発展を続け、後に合衆国建国の推進力となった。にもかかわらず、プリマスに上陸したピルグリムにこそ、発展著しい 19 世紀中葉のアメリカ社会で基本となる価値観とされたものが仮託され、記憶されたのである。

プリマスの記憶を神話化するために、「先祖の日」祭典での招待演説が貢献した。コミュニケーションが限られた当時であって、演説は強い関心を持つ多くの聴衆を集め、重要なメッセージを伝えた。特に、共に当時上院議員であったジョン・クインジー・アダムズとダニエル・ウェブスターの二人の演説は、国民国家像の構築に合わせてプリマスの記憶を語っていることが注目される。創られた共和国の指導者である二人は、多様で個人主義的なアメリカ人が共有できる国民神話として、プリマスの記憶を神話化するのに尽力した。

そして、南北戦争が迫り合衆国が分裂の危機を迎えると、プリマスの経験は使命による上陸の話ではなく、厳しさに耐え神に皆で感謝し晚餐を共にする祝祭としての面が、クローズアップされていった。何の変哲もなかった小さなタウンのプリマスが、アメリカの起源として注目されるようになった過程を追跡すると、国民国家アメリカが歴史を経て創造され変容していった有様を浮き彫りにすることができる。

1. アメリカの独立とピルグリムの神話化

1-1. アメリカ意識とプリマス上陸

17 世紀にイングランドから北米植民地に移住し社会を作った人々は自らをアメリカ人ではなく、イングランド人と意識していた。イングランド国王から特許状を得て入植したことで、イングランド臣民として陪審制や民兵制、地方の自治と代表

議会といったイングランド由来の諸制度を保障され、しっかり受け継いでいるものと信じていた。国王に対する敬愛も大きく誕生日の祝祭を執り行っていた。さらに、ほぼ1世紀にわたる入植、開拓そして先住民との大きな戦争を経て、社会が安定し発展に向かった18世紀にはイギリス化（Anglicization）と呼ばれる傾向が顕著となった。均整のとれた壮麗な邸宅（マンション）建築から家具調度、ファッション、社交作法、そして文化思想に至るまで、本国で盛んになった文物を熱心にアメリカに取り入れようとしていた。君主政、貴族政、民主政の混合政体でチェック・アンド・バランスにより専制支配を防ぐ体制はイギリスの誇るべき政治文化であり、アメリカ植民地の各政府も忠実にそれに従っていると考えていた¹。

むしろ、17世紀末に立憲主義による議会主権が確立し、スコットランド人も含めてブリテン島の全臣民が連合王国議会に代表されるようになって、本国とアメリカとの差違が意識されるようになった。一つの国民として一体性を強めるブリテン人からは、植民地の住民を自分たちとは異質な「アメリカ人」として見下す心情が露わになった。本国議会による代表なき課税に対するアメリカ植民地人の強い反発も、こうした意識のずれに対する怒りなのであった。代表による課税への同意はイギリス人であれば伝統的な自由と特権であって、植民地人にそれを認めないとすれば、イギリス人として認めていないことを明らかにするものだったのである。「アメリカ人」はまだ否定的なニュアンスを伴っていた。しかし、代表なき課税に対する抵抗運動が高まり、共通の理念と、ボイコットなどの共同行動、そして大陸会議などの協働組織を経験することで、イギリスと違う「アメリカ」のアイデンティティが成長していった。各人が独立し自分のことは自らが決める自治こそが、アメリカらしさの中核となったのである²。

そのようなアメリカらしさを神話的に表象する

のがピルグリム・ファーザーズによるプリマス上陸なのであった。自らの意志でアメリカに來り、自主独立の人々が契約を取り結んで自治を実践していった。ピルグリムの上陸は、イギリス世界が未開の地に拡大したのではなく、アメリカらしい自治、自由の精神がこの地にしっかりと根付いた第一歩であるとの記憶になった。

1-2. プリマスタウンの「先祖の日」

イギリスからの独立を意識することで、プリマス地方の人々のあいだで、独自の特別な経験に関心が集まるようになった³。印紙税法やタウンゼンド諸法に対する反対抵抗運動の後、1769年にプリマスの青年が集まってオールド・コロニー・クラブを結成し、史実を調査した結果、メイフラワー号の移民が上陸した日を12月22日だったと結論づけ、その日を「先祖の日」として祝宴を開いた。これ以後プリマスでは「先祖の日」が恒例となり、説教とともに記念の演説が執り行われ、行進が繰り広げられた。祝砲が放たれ、ゆかりの人物に向けて乾杯が捧げられたのであった。しかし、史実に忠実に即していえば、プリマス植民地の経験は決して晴れがましいものに限らず、争いや犯罪、スキャンダルも多く含んでいた。歴史の中から記憶すべき内容が、取捨選択され共有されるようになった。であればどのような史実を選択して記念すべきかが問題となる。

オールド・コロニー・クラブのメンバーには親英派の人々が多くいたために、イギリスに対する独立運動が一層盛り上がってくると、「先祖の日」を誰が主催して、何を記憶し、何を記念するのかが政治問題とならざるをえなかった。1773年は年末にボストン茶会事件が起こり、英米の決別が必至となる年であった。そうした緊張感が高まる中、73年オールド・コロニー・クラブは突然解散となり、「先祖の日」はプリマスタウンが主催する行事として執り行われた。反英運動および独立の機運が高まる中で、74年の「先祖の日」は盛大なものとなった。上陸の時最初に足を降ろしたとされる

¹ T. H. Breen, *The Marketplace of Revolution: How Consumer Politics Shaped American Independence*, New York, Oxford U.P., 2004, 167-172.

² T. H. Breen, "Ideology and Nationalism on the Eve of the American Revolution: Revisions *Once More* in Need of Revising," *Journal of American History*, 84, 1997, 21-23, 29-31; リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』（川北稔監訳）名古屋大学出版会、2000年、140～143頁。

³ 以下、先祖の日祭典に関しては、大西直樹『ピルグリム・ファーザーズという神話』講談社、1998年、112～121頁。および、James W. Baker, *Thanksgiving: The Biography of an American Holiday*, Durham, U. of New Hampshire Press, 2009, 63-64, 97-100.

巨岩の半分が切り取られて、広場にある自由ポールの下に据え置かれたのである。75年にはレキシントン・コンコードの戦いで独立戦争が始まり、ニューイングランド地域でも戦闘に巻き込まれ、さらに独立戦争が終了すると、新しい州政府秩序をめぐる政治闘争が激しく繰り広げられた。こうしたアメリカ人の経験によって、プリマスへの入植は本国旧世界からの分離を象徴することとなり、アメリカがイギリスから独立するのを正当化するものとして、外部のアメリカ人からも注目を浴びるようになった。この当時、プリマス植民地の歴史的事実をつまびらかにする史料が余り整備されていなかったために、かえって象徴として非歴史的に神話化するのが容易であった。ピューリタン信徒達のオランダへの追放、メイフラワー号の航海、最初の冬の飢えと苦難といった象徴的な物語が取り上げられ、独立戦争から建国までの混乱した時代に重ね合わせて記憶されるようになった。

しかし、アメリカ全体が、そして地元も極めて不安定な状況に陥った1781年から92年まで、「先祖の日」の行事は中断されていた。イギリスではないアメリカ、君主制ではない共和国といったネガティブに生成されたアイデンティティはあったものの、アメリカ人は未だにアメリカらしさがどのようなものか明瞭な国民性を創造してはいなかった。「先祖の日」が開かれなかった時期、イギリスから独立し、憲法制定により連邦国家が成立した後でも、アメリカ諸州はただちに一つの国家、国民としての意識を構築することができたわけではない。国民意識が欠けている以上、国民的神話が成り立つはずもない。そうした時代にプリマスであれ何であれ、アメリカのシンボルとして意識されることがなかったのは当然のことであった。「先祖の日」が再開されたのは、連邦憲法をめぐる政治対立が決着し、ワシントン政権も第2期が始まった1793年からであった。

1-3. アメリカ独立とピルグリムという記憶

建国当初は、ワシントンの個人的カリスマによる代表的具現が合衆国を演出していたといえよう⁴。西部の辺境も含め13州全体を一体とする意識

は薄く、まずは伝説的な独立戦争指揮官であるジョージ・ワシントン大統領への敬愛を通じて、かろうじて一体性を保ったのである。ワシントン大統領は1789年大統領就任に当たってヴァージニアの自宅から当時の首都ニューヨークの就任式場まで旅する途次、各地のコミュニティで歓迎の式典を受け、まるで国王の巡幸のような役割を果たしたのであった。就任した後も、首都では君主然として諸人と接見する形でのみコミュニケーションをとり、さらに諸地方を巡行し、祝祭儀礼によって地方と国家とをつないだ。

さらに、国家的な記念日の祝祭行事を挙行することで、一体としての国家意識を発展させる努力も有効であった。ワシントンが大統領に就任すると国家元首の誕生日を祝賀する祭典が、故郷ヴァージニアからアメリカ全土に広まっていった。イギリス国王誕生日の祝祭にならったものである。各地での盛大な行事の次第を新聞が伝えることで、祝祭は定型化してゆくことになった。2月22日の明け方、まず祝砲か鐘の音で始まり、鐘は繰り返し一日に何回か鳴り響く。昼には民兵隊や市民が行進し、最後に市民が中央の広場で集会を開く。夜には男性市民有志が店や家に集まって宴会を催し、ワシントンや国家に向けて乾杯を捧げるのであった。憲法制定で連邦国家として合衆国が建国されると、急速に7月4日の独立記念日が盛大に祝われるようになっていった。個人的カリスマを持ったワシントン大統領が退任し、99年に死去したこともあって、大統領誕生日の祝祭より独立宣言の理念による統合を祝賀することが、中心になった。

このような国民的な政治文化の催しに民衆が積極的に参加することで、アメリカ合衆国の基盤が固まり、独立自由というアメリカ国民意識が広まるとともに、プリマスの経験は地元プリマスを離れてアメリカ人が広く共有する経験としても記憶されるようになった。アメリカの中心都市の1つであるボストンでも、独自に「先祖の日」としてプリマス入植を記念する行事が始まり、盛大なも

⁴ 建国期の民衆的な政治文化に関しては以下の2書による。David Waldstreicher, *In the Midst of Perpetual Fetes: The*

Making of American Nationalism, 1776-1820, Chapel Hill, U. of North Carolina Press, 1997, 117-126; Simon P. Newman, *Parades and the Politics of the Street: Festive Culture in the Early American Republic*, Univ. of Pennsylvania Press: Philadelphia, 1997, 38-39.

のとなっていた。プリマスの初期入植者を最初に「ピルグリム」として讃えたのは、ボストンでの行事においてであった。1794年の先祖の日に歌われたオード（頌歌）で使われた表現である。「巡礼者」という位置づけはもはや、1620年の入植者の行為がただ未開の荒野開拓で大きな苦難に耐えた最初の移民といったものではなく、信仰と自由に結びつけて彼らを記憶しようとの思いがうかがえる。1798年アメリカが、海上においてフランスと戦争状態に突入し国家的な危機を迎えたとき、ボストンでの「先祖の日」は極めて大がかりな祝祭として挙行された。多様な利害を持つ多くの人が、危機に対処する負担を受け入れ、強い団結が必要なときに、同じような苦難の象徴として、ピルグリムの歴史的な記憶が神話化されていった。

2. 新生国家の危機とメイフラワー号の盟約伝説

新生の連邦国家アメリカ合衆国が大きな試練を迎えた。1800年の大統領選挙は、激しい党派対立の末決選投票がこじれて、長期間にわたって当選者が決まらず、軍事対決によって次期大統領が決まってしまう恐れさえも生じ、重大な危機に陥ったのであった。1801年、現職大統領ジョン・アダムズの政治決断もあって、決選投票に勝利したトマス・ジェファソンが新大統領に就任し、与野党の政権交替を無事に成し遂げた。アダムズもジェファソンもファウンディング・ファーザーズの一人であり、政治的立場や政策を大きく異にしているにもかかわらず、これまで積み上げてきたアメリカ合衆国を解体させてはいけないとの意識を共有していたものと考えられる。正副大統領の候補者を分けずに単純に大統領選挙人票の1位と2位をそれぞれ正副とするという合衆国憲法規定の不備によって起きた事件であったが、軍事力に決着を委ねるのではなく、共和主義精神に従い政権交替を実現したことで、合衆国に対する国民の敬愛は増大したものと思われる。

2-1. アダムズ演説と愛国の情

危機を乗り越えて政治が安定に向かっている1802年、プリマスでの「先祖の日」に招かれて演説を行ったのが、アダムズの息子で当時上院議員

のジョン・クインジー・アダムズであった⁵。彼は政治共同体団結の意義を強調して、プリマスに上陸したピューリタン達から絆の重要性を読み取ろうとしたのである。まず、彼はピューリタン達の愛国心に注目している。非国教徒であるゆえに本国を追われオランダで信仰の自由を享受していた彼らが、敢えてイギリス領の北アメリカの荒野に苦難をものともせず移住を決断したのはなぜか。母国への愛着の情は断ちがたいものであった。

有徳の士であればその心を自分の生まれた国とつなぐ絆、あの胸に響く思いの力を目一杯に彼らは感じていたのであります。極めて危険な航海の苦難に立ち向かい困難な遠隔の地に入植する労苦に耐えようと彼らが決意したのは、国外追放処分によって分断されてしまった自分の国とそうした絆を回復するためなのであります（14頁）。

党派対立により国家分裂の危機を目前にしたアダムズにとって、母国はその一部の民に厳しい処遇を強いるかもしれず、その場合でも、たとえ苦難を引き受けても国への愛着は切れないものなのであった。彼は、プリマスに上陸したピューリタン達に、父のアダムズ大統領の決断と相通ずる愛国の情を読み込んだのであろう。この演説はそうした愛国の情がそもそもアメリカの地に最初にやって来たピルグリム移民の根本にあったものとして記憶する試みなのであった（14～16頁）。

2-2. 憲法起源としてのメイフラワー号の盟約

そうした心情を向けるべき母国とはどのような存在であったのか。アダムズが特に注目したテーマがメイフラワーの盟約であった。メイフラワー号の移民達の間にも意見や利害の対立があり、鋭い緊張が見られた。実際にメイフラワー号でアメリカ移民としてわたってきた人々も、必ずしもピューリタンだけに限られていなかった。ピューリタン以外にも一般の職人や徒弟などが半分近くを占めていた。特許状に定められた上陸地点を外れ

⁵ John Quincy Adams, *An Oration, delivered at Plymouth, December 22, 1802*, Boston, Russell and Cutler. この演説からの引用はページ数のみ示す。

た北の地への上陸が近づくにつれて、移民内部に、特にピューリタンでない移民達に不満を持つものが現れ、反乱めいた言動も見られるようになった。それを治め、何とか調和を維持する方法が、盟約という形で合意し確認したルールであった。船内の自立した成人男性が集まり、上陸後の共同体の運営や秩序維持に関する基本事項を定めて確認し、署名したものが、メイフラワーの盟約であるとされた。アダムズはこれを以下のように社会契約として意義を強調した。

これは、哲学思想家が政治組織の唯一の正当な根拠だと想定している社会契約であり、その実証可能で独創的な人類史上におけるただ一つの実例なのであります。ここには共同体成員一人一人本人による全員一致で組織体をつくる合意があり、これによって人々は一つの国にまとまるのです（17～18 頁）。

しかし、実際にはこの盟約は文言形式からして、憲法典というより植民地の特許状に近い文書であったにすぎないと大西直樹は指摘している。あまたある特許状に近い文書の一つが、アダムズが強調するまで取り立てて注目されることがなかったのは当然であろう。

ところが、1800 年の厳しい対立を何とかして乗り越えなければならなかったアメリカ人にとって、対立を抱える多様な人々が盟約を結んで以後順調に植民を成功させた経験は、模範として記憶すべきものだった。本国を追放されたピューリタン達が滞在したオランダはスペイン植民地から独立したばかりであり、そこに政治共同体を創造する根拠についてグロティウスをはじめとして熱心な論争が戦わされていたことに、アダムズは注意を向ける。その論争に宗教問題以外は参加しなかったピューリタンも、その内容を追跡し吸収していたのであった。アメリカがイギリスから独立し独自の政治体制を創造した経験は、オランダ独立の経緯から学んで政治社会を築いたピューリタンと重なるもの、とアダムズは主張しようとしていた。彼はメイフラワー号の盟約が新天地に向かう人々が結んだ社会契約であるとして、合衆国憲法と重ね合わせてその世界史的意義を強調した（17～20

頁）。この演説は、メイフラワー号の盟約が合衆国憲法の起源であるとする神話の始まりとなった。

2-3. アメリカ西方発展の起点としてのプリマス

さらに、アダムズにとってプリマス上陸はアメリカが西方に拡大、発展してゆくことの出発点と位置づけられるのであった。演説の最後でアダムズはこの 2 世紀足らずの発展を振り返り、これからの 2 世紀で、アメリカの発展がヨーロッパ全体をも凌駕する可能性を夢見ている。ピルグリムに限らず、アメリカ全体で開拓者が切り開いた功績にも感謝を惜しまないとする。先祖に感謝を捧げその努力を今の世代が受け継ぎ、子孫の繁栄に思いを馳せる。「この帝国の運命は私たちの前にその可能性を一杯に広げており、人間の計算をはるかに凌いでいるほどであります」と彼は謳い上げた（30～31 頁）。そのためにも先祖の功績をしっかりと受け継がないといけないのであった。

その後のアダムズのキャリアを考えると、この時の思いは彼のアメリカ世界観の発露であろう。アダムズは 1819 年、ジャクソン将軍のフロリダ侵攻を踏まえて、国務長官としてスペイン公使オニースと交渉してフロリダ領地の購入を実現した上で、西方領土を太平洋岸まで一挙に拡大した条約を締結した人物である。大西洋から太平洋までの両洋大陸国家アメリカの基礎を築いた。そして、この条約の成果を受けて、西半球をヨーロッパ国際社会と違ってアメリカ的原理が働く別世界とするマニフェストであるモンロー・ドクトリンを起草したのもアダムズであった⁶。こうした功績から彼を国民国家としてのアメリカ合衆国の建設者とみる歴史家もいる。このアメリカの未来を見通していたアダムズにとって、プリマス・ロックに上陸したピルグリムの一歩は、大陸国家アメリカへの第一歩でもあるはずであった。

3. 国民国家アメリカの誕生

アメリカ人がアメリカらしさを意識的に構築するのに、1812 年の戦争、いわゆる米英戦争が大きな契機となった。独立戦争の結果、アメリカの独

⁶ 金井光太郎「アメリカン・システムのマニフェスト——ヨーロッパ公法秩序とモンロー・ドクトリン」、『アメリカ研究』49 号（2015 年）、1～19 頁。

立が承認されたにしても、合衆国は永続性に関して内外共に大きな課題を抱えていた。国内的には、十三州がそれぞれのアイデンティティを持ち、独立後それは強まったものの、全体を一つとするアメリカの国民性は未だ構築できていなかった。国際的にみれば、19世紀を迎えても北アメリカ大陸の情勢は不確定であり、国境線をこえて連邦共和国がカナダにまで拡大するのか、イギリス帝国のゆるやかな連合にアメリカが復帰するのか、いずれの可能性も明確に否定できない状態にあった。政治秩序に有効な体制として、帝国か共和国かの最終決着が独立戦争でついたとはいえないのであって、体制イデオロギーでせめぎ合う英米の冷戦状態が継続していた。アメリカとカナダの境界両側で、相互に相手を包含する体制を構想して、対抗していたのである⁷。これではアメリカ合衆国が明瞭な国民的なアイデンティティを構築するわけにはいかなかった。しかし、1812年の戦争を通して冷戦的せめぎ合いは終結を迎え、同じくイギリス由来の政治文化を共有するアメリカとカナダは全く違った政治共同体として、独自の意識を発展させるようになる。その結果、合衆国も諸地域の単なる寄せ集めではなく、一つの歴史と伝統を構築しそれを共有する一体の国民国家となったのである。プリマスのピルグリム・ファーザーズも、そうした愛国心高揚の中で国民の記憶となっていた。

3-1. カナダをめぐる英米冷戦

当時のヨーロッパの常識からすれば、アメリカ合衆国の共和政体は、永続できるような政治体制とは見なされていなかった。そもそも多数者による支配、つまり市民が自分たちを治める形で政治統合が達成できるのか、疑問とされた。しかも、アメリカ合衆国は南北にわたる広大な領域を保有し、歴史と伝統を異にする多様な地域を含んでいる。利害対立から国内が分裂し共和国は解体するものと考えられた。古典古代の都市国家アテネとローマ、同時代の小共和国ベネチアとスイスは地域と人口数が限られていたゆえに、鋭い利害対立

が顕在化することなく市民の間で合意をとることは不可能ではなかった。アメリカ合衆国の場合は北部と南部さらに中部、そして西部、大州に小州、農業州に商業州と利害を異にし、州内でも多数派と少数派との利害対立でシェイズの乱のような反乱まで起こっていた。ウィスキーなど酒類に対する消費税課税をめぐる反乱が起こり、1794年にはワシントン大統領直率の軍が編成されて鎮圧に当たるほどであった。連邦権力強化をめぐるフェデラリスト対レパブリカンの党派対立も激しさを加え、連邦の存続も危惧されるほどであった。不安定なアメリカに対して、イギリス帝国はアメリカ独立を教訓として安定した統治体制を築いていた。カナダ統治では、現地の自治に配慮し調和がとれた共同体秩序をかき乱さないように注意した。そうしていれば、脆弱なアメリカ共和国が重大な利害対立を引き起こし内部分裂に至るのは必至であり、結局イギリス帝国の穏和な統治の下に戻ることも期待されたのである。

他方、アメリカ合衆国の側はカナダ植民地の人民が君主支配の圧政にやがて抵抗するようになり共和制に転換して、アメリカの連邦に加盟してくるのが当然ととらえていた。植民の時期その他地域的諸事情から、当面本国の保護が恩恵となる段階があるとしても、13植民地が本国の専制に反発して独立したように、やがてカナダも同じ道をたどるはずなのであった。地元から遠く離れ、実情に疎い本国からの不当な規制介入は圧制と感じられ、地元の人民が自己決定に向かうのは時間の問題なのであった。こうした分かれ目の曖昧な地域を抱えて、英米双方が自己の体制の正統性を、君主政原理と共和政原理の優劣で競い合う冷戦状態が続いていたといえよう。

さらに、イギリス帝国は人口の少ないカナダへの移民を求める先として、アメリカ人をターゲットとしていた。実際に入植し開拓に従事する移民に限り、一定の土地を無償で付与する条件で移住を勧誘した。これに対して、合衆国の公有地分与は、大規模な土地投機を自由に認めたことで、大きな資本で企業家集団が広大な土地を一挙に購入し個人農場として開発分譲することが少なくなかった。公有地の分与であっても対価を払うのが当然とされ、個人農場として購入するにも貧しい農

⁷ こうした状況を指摘したのが、Alan Taylor, *The Civil War of 1812: American Citizens, British subjects, Irish Rebels, and Indians*, New York, Alfred Knopf, 2010. 特に、アメリカとイギリスとの冷戦的緊張については、45-72。

民の年収数年分の資金が必要であった。公有地開拓での政策方針の違い、無償入植と自由な投機事業との競合は、自由観念をめぐる英米のイデオロギー対立の一局面でもあった。

3-2. 国家の危機とアメリカ人意識

1812年からの熱い戦争を経験することで、双方の一体化幻想ははじけ飛び、相互に憎悪の記憶も積み重なり、全くの外国同士であることを確認し受け入れた。そうした認識から、両国は別個のアイデンティティを強化してゆくのであった。まず、先住民との関係から大きな相違を認識したことが、憎しみ合う元となった。人口比において 20 対 1 の不利を抱えるカナダにおいて、イギリス軍は戦力として先住民との同盟をフルに活用せざるをえなかった。先住民戦士の実戦力そのものに加えて、彼らのゲリラ戦法や殲滅戦術、そして頭皮剥ぎなどの残虐行為が心理戦で大きな効果を奏した。数百人の先住民戦士が参加している部隊に対して、アメリカ軍兵士は恐怖心を抱き、戦わずして降伏する事例があった。イギリス軍はそうした効果を十分に利用して先住民に叫び声を上げて攻撃させたり、先住民が参加していないにもかかわらず兵士に先住民の叫び声をまねさせたりして、アメリカ兵を恐怖に陥れた。イギリスとの戦争以前から西部辺境で先住民に苦杯をなめていたアメリカ軍にとって、そのような戦術はイギリス軍ならびに先住民に対して、強い遺恨の記憶を残すことになる。弱小のカナダは本国の支えを一層頼み感謝を捧げる一方で、アメリカ兵の自由で規律なき姿を軽侮した。加えて戦場となった地域では、同胞に対する扱いではなく略奪破壊の実害を被る事例が多かった。同じイギリス系であっても、アメリカ人とカナダ人は明確に違う意識を持つようになった⁸。

アメリカ合衆国は地域的にも党派的にも国内分裂の危機に瀕していたにもかかわらず、イギリスとの激しい戦いを経て国民的な一体性を高めることができたのであった。開戦当初、与党レパブリカン派の主導で始まった戦争に対して、野党フェデラリスト派の牙城であるニューイングランド諸州は非協力の態度を保持した。合衆国国民が一丸

となって強国イギリスと戦ったわけではなかったのである。諸州の州兵を連邦軍に編入する手続に知事が反対する州もあった。増税と国債発行で戦費を賄う連邦政府予算も、大きく削られて十分な戦力動員が全くできず、カナダ国境の戦線では兵力も不足し、押され気味に停滞してしまった。さらに、イギリスは圧倒的な海軍力を自由に駆使して首都ワシントンにまで艦隊を送り、陸戦隊がアメリカ守備兵を潰走させ市街を焼き討ちまでした。こうした戦況を背景に、イギリスは最終的に再び合衆国を分割に追い込むつもりであるとの噂が危機感を煽った。マディソン大統領は議会へのメッセージの中で、イギリス側が「我が国の発展と繁栄に対して、さらには国家としての存続自体に対して致命的打撃を加えようとするおそれがある」と警告した。しかし、対英平和交渉使節の一人ギャラティンは、自身の悲観的な報告に続けて、「国民が団結を保ち、団結をしっかりと示すならば攻勢の衝撃に耐える」ことが可能であろうと結んでいた⁹。

3-3. アメリカ国民の創造

戦況が厳しくなるに伴い、諸地域の人々も連邦政府が全国レベルで海防体勢を構築する必要を認識するようになった。イギリス海軍の侵攻に対する防備は、民兵隊の力を主とする地元だけで手当できるものではなく、全国的な防衛に必要な財政措置、防衛措置に党派を超える支持が見られるようになった。例えば、戦争に反対し非協力的であったフェデラリスト派のハンソン議員は、国家の命運に関わる以上フェデラリストも戦争を支持するべきであると主張した。アメリカ人が一層アメリカ人になったのである¹⁰。

そうした国民意識の変化を端的に示すのは、現在の合衆国国歌である「星条旗」の詞が、この戦争の一戦闘シーンから生まれたことである。1814年9月イギリス艦隊がボルティモア港守備の要塞

⁸ 1812年の戦争に関しては、*Ibid.* 先住民との関係は、125-145 に詳しい。

⁹ J. C. A. Stagg, *Mr. Madison's War: Politics, Diplomacy, and Warfare in the Early American Republic, 1780-1830*, Princeton Univ. Press: Princeton, NJ, 1983, 504-509, 424-428; John Resch, *Suffering Soldiers: Revolutionary War Veterans, Moral Sentiment, and Political Culture in the Early Republic*, Univ. of Massachusetts Press: Amherst, Mass., 1999, 394-397, 437, 457.

¹⁰ *Ibid.*, 449, 459, 465, 474.

マクヘンリー砦を終日激しく砲撃した。その様子を見ていたスコット・キーが、ただちに作詞したものが「星条旗」であり、その詞はすぐに印刷されて町中に広まり、当時はやっていた歌の節にのせて歌われる愛国歌となった。マクヘンリー要塞の戦闘は、もはやボルティモア市民だけの地域的経験ではなく、独立と自由を守るアメリカ市民全体が共有し、記憶する経験なのであった¹¹。

終始劣勢の中でも、アメリカ合衆国は単独で強国イギリスと戦い敗北の憂き目に終わることなく、交渉によってガン条約を締結し、終戦に持ち込むことができた。そのことで、合衆国は解体寸前の脆弱な共和国であり国民は各自の勝手な欲望追求に熱心なだけであるとの国際的なイメージを払拭することになった。講和に際して、交渉使節の一人、ジョン・クインジー・アダムズは「わが国の威信回復」に貢献できたと述べ、同僚のバイヤードはヨーロッパ人がアメリカ人にこれまでにない敬意を持って接するようになったと語っている¹²。アメリカの人々も地元の地域や州だけでなく、国民国家アメリカにも自らのアイデンティティを見いだすようになった。ギャラティンが私信で書き送っている。「今や人々は自分の誇りや政治的意見に関して愛着を抱く対象として以前より大きなものを持つようになっている。彼らは前よりずっとアメリカ人となっている」。1812年の戦争を戦い抜くことでアメリカ人が明確な国民意識を持つようになったことが、当時の人々にもただちに感じられたのであった¹³。

しかも、ベルギーのガンで条約締結したその時、ニューオーリンズでは英米両軍が最後の一戦を交わし、アンドリュー・ジャクソン将軍の果敢な指揮によりアメリカ軍が大勝を博したのである。ガ

ン条約の交渉に当たって、戦況有利なイギリス主導の下に条約上いずれの側にも明確な勝敗はなかったものの、ニューオーリンズでの勝利の報とともに講和条約締結の報が首都ワシントンに届いたために、アメリカ側からすると1812年の戦争はアメリカ勝利の記憶となった。

4. ピルグリムのパトリオティズム

19世紀の国民国家構築とそれに伴う国民性神話の構築が、プリマス神話にどのような影響を与えたのであろうか。1812年の戦争を経て合衆国が国家的一体性をやっと共有するようになった頃には、プリマス上陸200周年記念の祝典が開催されるところであった。その盛大な祝典で演説者として招かれたのが、新進気鋭の政治家・弁護士で後にホイッグ党の大物政治家となるダニエル・ウェブスターであった。彼の演説は、アメリカの国民国家構築が進んでいることを浮き彫りにするものである¹⁴。ピルグリム・ファーザーズにとっても、このアメリカの地は既に愛着措くあたわざるパトリ、祖国であると受け止められていたとし、財産の基本的平等を基礎に共和政治が見事に機能し、その子孫が今や太平洋岸に達しようとしていると彼は強調したのであった。

4-1. プリマス上陸200年の成果

1812年の戦争は、合衆国建国から30年後の革命第2世代にとって、独立戦争期のパトリオティズムをやり直す戦いとなった。彼らは自らがファウンディング・ファーザーズのごとくパトリオットとなって、強大なイギリス帝国の侵害に対して愛する国と自由の体制を守る戦いに身を捧げる意気込みであった。そうした思いを反映して、プリマスに上陸したピルグリム達も生まれた地を離れ新たにやって来たアメリカの地に、自分たちと同じような愛情を注いでいたことをウェブスターは繰り返し主張した。古代以来人類はたくさんの植民活動を行ってきた。同時代においてもアメリカ大陸および西インド諸島はさかんな植民活動の舞台であった。その場合、植民の目的は軍事支配の

¹¹ キイの詩はすぐ印刷され、1週間のうちに新聞に転載された。戦闘から1週間後に掲載した新聞は次のように記している。「ここに掲載する詩は美しくも感動的な感情の発露であり、この戦闘を超えて、また戦闘が引き起こした衝撃を超えて、長く読み継がれるであろう。この詩はすでに広く知られているが、ここに改めて再録することで、マックヘンリー砦の防衛というかくも偉大な業績を讃えるにふさわしい詩行が、この偉業の記録に生命を吹き込み得たことは、我々の喜びとするところである」。スコット・グインター『星条旗 1777-1924』（野村達朗他訳）名大出版会、1997年、43-48頁、上の引用は45頁。

¹² Sean Wilentz, *The Rise of American Democracy: Jefferson to Lincoln*, W. W. Norton: New York, 2005, 167.

¹³ *Ibid.*, 181.

¹⁴ Daniel Webster, *Discourse, delivered at Plymouth, December 22, 1820*, Boston, Wells and Lily, 1821. 以下、この演説の注記はページ数のみ括弧内に記す。

拡大のためであり、あるいは資本投下による収益の拡大なのであった。いずれも侵入者として植民した土地から何らかの利益を搾り取るものであり、その土地に自らの労力を投じて改良を加えることはしなかった（30～40 頁）。しかし、ピルグリムがいかに違う入植者であったかを彼は指摘する。

彼らがこの岸辺を、その時にはまだ荒れ果て、凍え、未開で不毛の岸辺を目にしたとき、実は自分たちの国を見つめていたのです。あの思いの入り交じる強烈な感情、私たちが国への愛情と呼ぶ気持ち、人の心にあってまずは消えることのない心情、この地こそそれを注ぎ込み慈しむ先であったのです。土地と太陽以外に「国」となるもの全てを、心に働きかける愛情愛着という道徳的要因の全てを、彼らはその身と共にこの新たな住処に持ち来たったのであります（41 頁）。

彼らが上陸した土地に愛情を注いで、懸命に働いて開拓し、改良し、すばらしい社会を築いたと強調している。そもそも到着する前から吟味選択した上で政府を組織し、法を整え、かの地に上陸したのは、そうした意気込みと土地への愛着の表れなのであった。そうした新しい住処での営為の積み重ねで、離れた故国への思いに打ち勝ってアメリカへの強い愛着が育まれたのであった。

生まれ故郷を慕う自然な思いを無理にも断ち切ってこの地に来り、そこで新たなやりがい、利益そして愛着の場を見つけました。そこで次第に故郷への思いに勝り迷いのないまでに高まった気持ち、「こここそが自分の国だ」との思いが一杯となったのです。パトリオティズムは本国への強い思い入れを排除してアメリカに限られたものとなりました。（51 頁）

これはピルグリム・ファーザーズの気持ちそのものではなかったであろう。しかし、愛国心が高まり独立革命を再現する気分が盛り上がったウェブスターの時代におけるアメリカ人の気持ちを、十分に代弁する演説であったといえよう。

4-2. 財産の平等と民主共和政の基礎

ピルグリム・ファーザーズが創り上げ愛おしんだ祖国アメリカは、当然すばらしい幸せな国であった。プリマス以来、独立自営農が自ら勤勉に働き共同して自由な秩序を維持してきた。革命後の見事な共和政治の展開は、プリマスの経験に由来するものであるとウェブスターは主張した。ニューイングランドの先祖は、大きな資本や封建的関係をもたらすことはなかったと指摘して彼は説明する。

彼らは状況に迫られて土地を割り当て分与したのであります。この必要上の規則が「将来の政府の枠組みおよび形態を規定した」と申し上げてよろしいかと存じます。彼らの政治制度の特質は財産に関する基本法によって決まりました。この法律は財産を男女問わず子供達に分与しうるものとしたのです（71 頁）。

ウェブスターによれば、財産が一部の階級に集中しその財産を次世代に受け継いでゆくことを保障する体制の国では、強い権威が支配する。他方、革命後のフランスのように財産相続を単に均等にするだけでは、自立できない貧困な大衆が生まれるにすぎない。いずれも共和政治は成り立たない。それに対してアメリカはピルグリムの経験を革命の後全国的に拡げ、国民の大多数が一定の土地を保有し、自活が十分にできる社会になったと彼は述べる。自分の財産を保持する農民は、利害に対する責任意識があるため、知識を有し熱意を持ち活動的であり、それゆえに公共秩序の形成に意欲を持って参加すると彼は論じた（68～79 頁）。

ところが、実際にアメリカで世襲的財産が批判されるようになるのは、19 世紀に入りプリマス上陸 200 周年を迎える頃からであった。ウェブスターは、当時次第に正当とされた勤勉の価値観をプリマスの経験に読み込んでいた。その頃になると、セルフメイドマンがアメリカの国民性を代表するものとなった。建国当初は、ジョージ・ワシントンのように大きなプランテーションを有するがゆえに無私高德の賢明な指導者が、理想的な市民なのであった。生活のために勤儉力行しなければな

らない人物は、どうしても自己一身の生活安定に余念がなく、公共のために奉仕する余裕はないとされていた。休まず勤勉に労働することは必ずしも理想の生き方ではなかった。それに対して、独立後アメリカでは投機的活動で商工業がさかんとなり、企業家精神を持って農村を離れ積極的に事業を興し成功する人間が、相次いで出現した。そうすると、アメリカ人を代表する人物であれば、勤勉に労働にいそしめないことは許されなかった。生まれながらの大プランターのワシントンも、伝記などでの人物構築では「農場主」として農園経営に勤勉に励む存在として表象された。そうした姿は、ワシントンの自己認識と相違し、共和主義の理想にはむしろ反することであっただろう¹⁵。

ファウンディング・ファーザーズの中では唯一ベンジャミン・フランクリンが、この時代の勤勉な市民像に適う存在であった。彼の有名な『自伝』がアメリカ国内で公刊されるのはこの頃である。孫のウィリアム・テンプル・フランクリンが全集の一部として刊行したのが最初であり、1818年のことであった。原稿を精査した決定版とされるスパークス版は1844年に出版された。以後彼の『自伝』は自伝文学の一典型となり、セルフメイドというアメリカ的価値観を知る最良の文献となった。アメリカ人らしさの意識が変容し労働に対する価値観の変化があって、フランクリンの生き方が再評価された。因みに、1820年のウェブスターの演説でも、フランクリンはマザー牧師父子やハーヴァード大学総長ジョン・レヴェレットと並んでアメリカの精神的な偉人の一人として数え上げられている（53頁）。

4-3. プリマス上陸から大陸国家へ

前述のように、ウェブスター演説の前年、1819年にはスペインとの間にアダムズ・オニース条約が締結されており、アメリカ合衆国は太平洋岸まで一気に領土を拡大した。23年にはモンロー・ドクトリンが合衆国の発展を高らかに謳い上げる。こうした急速な合衆国の発展はアメリカらしさの主要な要素となり、それはピルグリムの原点にさ

かのぼるものであるとの言説がウェブスターの演説に見られる。ピルグリム・ファーザーズの上陸以来いかに急速にアメリカは発展をしてきたか。200年を経て、入植の波は2000マイルを超えてエリー湖岸に達しており、帝国と呼ぶのに十分であるとしている。初期移民の子孫が今やここまで拡がり、さらに足を伸ばそうとしていることを演説は予測している。

ニューイングランドの地に祖先を持つ人々が今や100万人以上も、60年前には人跡未踏の森林であった地域で自由で幸福な生活を送っていると言っても間違いないでしょう。川だろうが、山だろうが、海であろうが、勤勉で恐れを知らずに前進しようとするのを止めるものはないのです。すぐにもピルグリムの子孫達が太平洋岸に立つてありましょう（61頁）。

この後わずか30年でフロリダ、オレゴン、テキサス、カリフォルニアと北米大陸主要部を獲得して、それをマニフェスト・デスティニーと正当化するアメリカ拡大の国民意識は、その原点をピルグリムに求めるのであった。プリマス上陸200周年記念は、これからの200年を予想し、夢を大きく広げる機会となった。ただ、実際の進歩に「予想はとても追い付かない」ほどであった。

プリマスの上陸を、こうした宗教的、政治的に偉大で発展に寄与する英雄的な行為として顕彰する動きは、1850年代にピークを迎える。プリマス移民・開拓の指導者達の徳を慕い、功績を賞讃して、像がいくつも建てられたのである。そして、1853年には海岸に残った岩の底部を聖別し、岩を覆う壮麗な建造物の建設が始まり、壮大な儀礼や演説、行進、祝宴の下で1859年に完成が祝われた¹⁶。プリマス・ロックはアメリカの自由と発展の神話を象徴する国民的な記念碑となったのであった。

5. 南北分裂の危機と家庭的感謝祭の神話

アメリカとは何か、そのアイデンティティを一層明らかにする必要が高まったのは、南北が分裂

¹⁵ ゴードン・S・ウッド『ベンジャミン・フランクリン、アメリカ人になる』（池田年穂他訳）慶應義塾大学出版会、2010年、第5章。

¹⁶ Baker, *Thanksgiving*, 100.

へと向かう時代においてであった。社会では急進的な奴隷制即時廃止論と積極的な奴隷制擁護論という両極端の主張が激しくぶつかり合っていた。いずれの主張も社会体制について、絶対的な普遍平等に対して、越えることのできない人種的格差に基づく秩序という、極めて理念的で、現実を無視した抽象的な議論を繰り広げた。絶対の平等から「生物学的」差別までの拡がりの中で、多くの国民にとってアメリカらしさとして共有できるものは何か、改めて問い直す必要があった。そうした状況の中、厳しい対立のない古き良きアメリカにさかのぼって、国民全体が和やかに祝えるような物語を求める気分が高まった。独立戦争と革命建国の物語は現在の南北の地域対立を含み、奴隷制をめぐる議論も当然争いとなっていた。それよりはるかな昔、飢えと寒さから身を守るのに皆が必死で相互に協力して苦難を乗り越えていた最初の入植時代を回顧することに関心が集まっていった。南北分裂の危機の時代から南北戦争後の厳しい再建の時代に、プリマスのピルグリムの物語に英雄的側面よりも人間的な関心が強まったのであった¹⁷。

5-1. 人間ピルグリムへの共感

普通の人間として共感できる世界を求める要望に答えるにあたって、史実そのものとは別としてプリマス入植の物語は理想的な要素を持っていた。信教の自由を求めるピューリタン信徒は自分たちの新天地を求めて移住し、しかも彼らは家族を伴ってやって来た。南部のジェイムズタウンでは圧倒的に独身男性が多く、また早く財産を作って本国に戻ることを願うものが多かった。それに対してピューリタン神話では家族の協力の下に自分たちのコミュニティを建設し、そこを信仰者による「丘の上の町」としたのであった。彼らは自分たち自らが勤勉に働き、皆で集会場、住居、畑を作っていたのである。そこに先住民の協力、支援も得ることができた。しかし、他人の労働を搾取することはしなかった。奴隷制をめぐる厳しい対立を背景においてみれば、アメリカ人の入植神話としてプリマスほど理想的な物語はなかった。そし

て、アメリカ国民全体の歴史的記憶とするのに相応しい内容を求めて、専らプリマスにとどまらず、ボストンおよびマサチューセッツ、ニューイングランド全体のピューリタンの経験から、アメリカらしさを抽出して神話化していったのである。

また、その頃キリスト教の信仰復興運動である第2次大覚醒運動が広がる西部においても、プリマス移民は西部の宗教的、道徳的雰囲気に適った記憶であった。また、階級的には、プリマスの物語は中産階級的な家族道徳を支持する記憶である。民族的、歴史的一体性を必ずしも持たない人々が、共通の理念の下で共同し団結した記憶でもある。そして、ここから広大な西方への移動が始まった記憶にもなっている。南北でいかなるアメリカを正当なものとするのか激しく争う中で、部外者として先住民との触れ合いしか異質な存在のいないプリマスの記憶が、自由なアメリカを懐かしむ物語なのであった。

5-2. 英雄の上陸から家庭での感謝へ

ピルグリムへの関心が高まるに伴って、歴史研究が本格化して熱心に史料の追跡編纂が始まった。その結果、1822年に『モートの物語』が公刊され、そして1856年に今や有名なウィリアム・ブラッドフォードの『プリマス植民地について』の原稿が発見され、公刊されるに至る。そのことによってプリマス入植者諸個人の詳しい日常、生活の具体的な様子や思い、悩みなどを生き生きと知ることができるようになったのである。それは人類の歴史上燦然と輝くピルグリムへの幻滅などではなく、人間としての親しみと共感を呼び起こした。そうした歴史に記述されている女性や子供の様子も明らかになって来た。自分たちと変わらない人々がこの厳しい状況の中でいかに生きていたか、どのような気持ちであったかが、大きな関心を引き覚ました。

さらに、文学としても恋愛ものを中心として詩や小説、戯曲がさかんに作られて、感傷的な人間らしさが描かれ人気を博してゆく。1858年アメリカの代表的詩人の一人、ロングフェローの詩『マイルズ・スタンディッシュの交際』が刊行された。これは、プリマス植民地最高指導者の一人であるスタンディッシュを、実話に基づいてプリシラと

¹⁷ 産業化および南北対立による緊張と感謝祭について、*Ibid.*, 64-72, 99-103.

いう女性をめぐる三角関係の主人公として描いたものである。2ヶ月で2万5千部を売り上げる人気で、以降も版を重ねてピルグリムの恋物語は、アメリカ人誰もが知る伝説となった。人々が求めたのはもはや威厳ある彫像になっている英雄的・男性的ピルグリムではなく、小さな絵画やイラストに描かれるピルグリムの家族的な姿であった。

アメリカ社会が急激な変化を遂げると、国民神話も変化させる必要があった。プリマスでの経験から、そうした時代に合った物語が感謝祭として神話化されたのである¹⁸。経済の産業発展が急速に進み、都市化は人口100万人を越える規模にまで拡大を続けていた。生まれ故郷を離れ、都市で労働者として働く多くの若者は孤独であり、人間性を喪失しかねなかった。そうした人々が母親のもとに帰って家族で晩餐を楽しみ自分を取り戻す機会として、感謝祭が全米に広まっていったのである。サラ・ヘイルら民間女性の熱心な活動によって、11月末頃の日が感謝祭として祝賀されるようになった。そうした民間習わしの広がりを踏まえて、南北戦争の最中、アメリカ合衆国大統領リンカンが戦乱における神の恵みに感謝する日として11月の第4木曜日を国民の祝日と定めた。感謝祭が癒しの祝祭であることから、リンカンの決定は軍事から社会再生への課題転換を広く知らせるのに資するメッセージであったろう。

おわりに

18世紀から19世紀にかけて国民国家は何よりも戦争に勝利し独立を守るものであり、男性的・英雄的な神話に彩られて輝かしい国民国家像が、創造されたのであった。冬の凍てつく海岸縁の荒野に、信仰に燃えるピルグリム・ファーザーズがプリマス・ロックに上陸の足跡を記すシーンこそが、英雄的国家起源の神話としていかにも相応しいものであった。しかし、南北戦争という国民国家分裂の重大な危機は、英雄的な勝利のみによって解決できるものではなかったのである。戦争が終わればなお一層調和を回復してゆかなければならない。その困難な役割を担えるのは家庭的な優しさであったろう。飢餓による全滅寸前の厳しい冬を

耐えたピルグリムたちは、感謝祭で皆がそろって実りを神に感謝して共同体の永続を祈った。今や国民国家が成熟し、急速な産業化時代を迎えた合衆国を再建するに当たっては、感謝祭の祝祭が国民神話として極めて適切だったのである。

さらに、19世紀の中頃から後半にかけて欧米ではヴィクトリア時代といわれる、道徳的な家庭生活と女性、中でも母親を、人間性育成の中核におく世界が登場する。ヴィクトリア時代の中産階級文化の中で家庭が大切なものとなってゆくにつれて、「先祖の日」の公的祝祭に対して、感謝祭での家庭的催しが多くの人々の心をつかむようになった。ピルグリムが英雄的にアメリカの地に初めて上陸した日ではなく、上陸して苦難を乗り越え先住民の教えにも助けられ、やっとのこと最初の収穫を迎えることができそれを皆で神に感謝した日こそ、祝うべき日となった。男も女も家族そろって協力したからこそ、困難にも立ち向かうことができたのであった。起源であるプリマス入植以来、連綿として家庭こそがアメリカらしさを育む場であり、そこでの母性、慈しみ、礼節がよき市民となるにも重要であるとされるようになった。国民生活の理想も男と女の親愛なる絆と協力に基づく暖かな家庭となった。そうした時代にも、プリマスでのピルグリムの経験は、ファーザーズ神話からファミリー神話へと発展を遂げ、その記憶から、感謝祭が国民的祝祭として、今日に至るまで広い層のあいだに強い愛着を持って定着しているのである。

¹⁸ ベイカーは感謝祭に「創られた伝統」の典型例を見ている。102～103頁。